特集
つながりの原点「家族」を問う

中国型「家族ケアシステム」のゆくえ
―チャイナ インワンダーランド

宮坂 靖子
Written by Yasuko Miyasaka
奈良大学社会学部教授

日本と中国の「家族」のあまりに多くの違いに、何度カルチャー・ショックを感じたかわからない。中国の家族には、柔軟で変化自在な親族ネットワークという言葉がぴったりであるが、それが子ども（きょうだい）間の平等という意識に支えられ、特定の子どもに負担をかけないという家族や親族のあり方を可能にしている（※1）。

筆者は2007～09年の3年間、中国東北部にある遼寧省大連市に住む高齢者を対象としたインタビュー調査を主に行ってきたが（※2）、日本と中国の間の一番大きな違いを感じたのは、高齢の親との同居や介護についての意識であった。

「どの子と同居したいか、どの子に介護をして欲しいか」という質問に、「（性別にかかわらず）子どもたち全員」と回答する人が多かったのだ。共同研究者の李東輝（大連外国語大学）が、09年4～5月に65歳以上の高齢者100名を対象に行った質問紙調査によれば、「親の世話は子どもが平等に分担すべき」という問いに「そう思う」「ややそう思う」と回答した人は92・4％、それに対して、「親の世話は長男が責任を持つべき」に「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人は74・3％にのぼった。

調査を進める中で、この意識が「財産相続」の意識とセットとなっていることがわかってきた。前述の李東輝の調査によれば、高齢者の過半数は「全きょうだい（すべての子ども）の均分相続」を希望している。「男きょうだい（息子間）の均分相続」は5％弱しかいない。

周さん（83歳、女性）は既に夫を亡くし大連市内にひとりで暮らしているが、「独居老人」のイメージとはかけ離れている。周さんには6人の子ども（娘3人、息子3人）がいるが、4人が大連市内に住んでいて、どの子どもも毎週1回から数回、母である周さんを訪ねている。筆者らが訪問した時、ちょうど末子の三男が家にやって来た。彼は私たちに簡単な挨拶をすますと、慣れた手つきで床の拭き掃除を始めた（三男は以前母親と同居していた）。

「将来、誰と同居したいか、将来、誰に介護して欲しいか」という問いに対する周さんの答えは、「6人が順番で家に来て1カ月くらい交代で一緒にいてくれたら嬉しい」であった。周さんには、誰か特定の子どもとの同居という考えはないらしい。これは日本人の感覚とは際だった違いである。

もちろん、日本においても制度としての「イエ」がなくなって久しい。長男との同居を希望

老人ホームの母親を見舞う娘たち（大連市内）

する人も減少してきているし、希望しても実現できない状況も多く見受けられる。

しかし、70～80歳くらいの高齢者には、まだ「長男」規範や、「イエを継ぐ」という「イエ制度」の残滓（ざんし）が残っている。20世紀前半頃の日本の「イエ」（理念型）は、直系家族制度であり、原則として親は長男夫婦とのみ同居するというものであった。それに対して、中国の「家」（理念型）は、複数の息子夫婦が親と同居するというものであった。

父系という点では日中は同じであるが、家族というシステムの構成原理が日中ではまったく異なるのである。そしてこのように異なった「家」システムを形成した根幹にあったのが、日本では「長子単独相続制」、中国では「均分相続制」であった（※3）。

中国人高齢者が抱いている「年老いた時の世話はすべての子どもたちにして欲しい」という意識の根底には、この中国の「家」の理念がまだ脈々と息づいていることを示している。先ほど紹介した周さんは、財産相続については、「6人の子どもすべてに均等に」と話してくれた。

また、日本の「イエ」では長男夫婦が同居するといっても、高齢者の介護をするのは長男本人ではなく、妻（長男の嫁）の役割であった。しかし中国では、娘だけでなく息子も親の身体的介護を行うことが多い。1949年の中華人民共和国建国によって推し進められた社会主義的な男女平等思想、共働きを主とする労働政策により、息子・娘という性別にかかわらず、さらにいえば、長男か二男・三男かという出生順位にもこだわらない、子どもたち全員によるケア（世話）の共有という、日本とは異なる家族のケア（世話）システムを作りあげたのである。

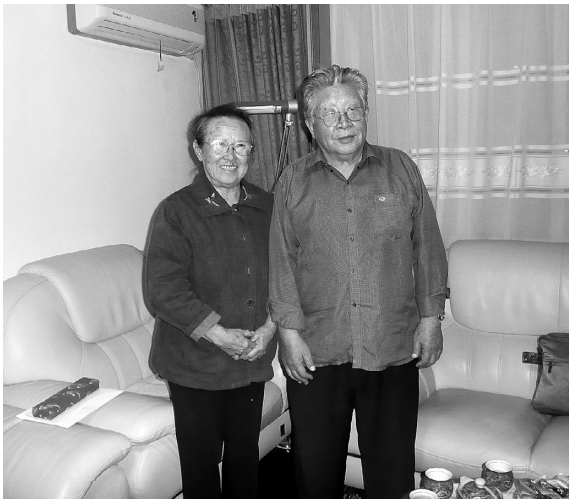
呉さん（83歳、女性）も大連市内にひとりで暮らし、ホームヘルパーの女性を週6日雇っていた。呉さんには4人の子ども（すべて息子）がいる。以前は四男と同居していたが海外勤務になり、また足を悪くしてひとりで家事全般をこなすことができなくなり、ヘルパーを雇うことになったという。残り3人の息子は全員が大連市内に住む。しかも、3人とも自動車を持っているので、ほぼ毎日のようにいずれかの息子が果物などを持って顔を見せてくれるという。

私がインタビューを行った高齢者10人余りのうち、子どもと同居している人は1人もいなかった。紹介した周さんや呉さんのように、

農村で暮らす男性高齢者（旅順農村部）

同じ市内に子どもたち夫婦が居住しているというケースがほとんどであり、この親と子の「住住接近」という条件により、頻繁な交流が可能になっている。老人ホームを訪問すると、面会に来ている子どもたちの姿をよく見かけた。別居している高齢の親と子どもとの濃密な交流の存在も日本との大きな違いである。

ただし、この頻繁な交流を維持している仕組みは、先に挙げた「家」システムの違いだけに起因するのではなく、もうひとつ、「人口ボーナス期」という人口構造の恩恵にあずかっていることを指摘しておかなければならない。



自宅で２人で暮らす夫婦（大連市内）

人口ボーナス期とは「年少人口（15歳未満人口）や老年人口（60歳以上）が、生産年齢人口（15歳～59歳）に比べて少ない時期」のことをいう。きょうだい数が多い世代が労働力である時期といえば、もっとわかりやすいかもしれない。中国は１９６５年に人口ボーナス期に入り、このような多くの子どもたちを持った親世代は広範かつ濃密な親族ネットワークを築いてきた。しかし、この人口ボーナス期は今年（２０１０年）にその終焉を迎えようとしている（※4）。

70歳代前半の張さんご夫婦には娘2人がいるが、2人とも既婚者で、1人は北京、もう1人はアメリカで暮らしている。張さんご夫婦は、老後に子どもとの同居はもちろん近居でさえも望めず、将来は老人ホームへの入所を考えていると話してくれた。先に紹介したホームヘルパーの派遣業務も行政の大きな役割であるが、人材が払底し需要に供給が追いつかないという。このことは、既に家族や親族内で交流やケアの資源を調達できなくなりつつあることを示している。つまり、中国の「よき伝統」は道徳的にではなく、人口学的に終焉を迎えざるをえないのである。

１９７９年に開始された一人っ子政策により、生まれた一人っ子第1世代の人たちは30歳になっている。現在50歳代である彼ら／彼女らの親が年をとった時、多くの子どもたちによる頻繁で濃密な交流という親族ネットワークを実現することは不可能である。

中国の一人っ子政策という壮大な実験は中国の家族の絆を、どのように再編成していくのであろうか。子ども間の平等をベースにした、子どもの性別や出生順位にこだわらないという特有のケアシステムに対して、人々はどのような決断を下すのであろうか。 CEL

（※1）落合恵美子・上野加代子『21世紀アジア家族』明石書店（２００６年）、落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房（２００７年）

（※2）山根真理を代表とする文部科学省科学研究費補助金による研究プロジェクト「20世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース」の研究分担者として調査を実施した。

（※3）瀬川昌久『中国社会の人類学―親族・家族からの展望』世界思想社（２００４年）

（※4）嵯峨座晴夫「アジアの人口高齢化と高齢者生活」（「人口と開発」23、２００３年）

宮坂 靖子（みやさか・やすこ）

奈良大学社会学部教授。お茶の水女子大学博士課程人間文化研究科単位取得退学。専門分野は家族社会学、ジェンダー論。社会における育児不安と父親の育児参加、アジアにおける家族とジェンダーの比較を中心に研究。主な著書は、『アジアの家族とジェンダー』（共著、勁草書房）など。